

## 冷笑（永井荷風）

明治末葉の東京に、揃つて「今の世の中には向かなさうな人物」が五人ゐた。銀行頭取の小山清は、「思想が緻密で觀察が鋭敏」な理想家で、卑俗な現實に失望して「冷淡皮肉に人生を見て居る」趣味人だし、狂言作者の中谷丁藏は、「性格も嗜好も其の理想も悉く江戸の洒落本に現れたる色男」で、「舊日本の生きてたる形見」として「現代の新思潮に侵されざる勇者」だし、商船事務長の徳井勝之助は、實業家の父親の「壓伏的」で「東洋の豪傑的粗放」な態度に反撥して、親の家を遠く離れ遠洋を彷徨ふ「淋しい厭世家」だし、南宗畫家の桑島青華は、「凡て風流韻事は自ら味はつて自ら娛しむ處に其の眞意がある」と信じる「貴族的孤立主義の樂天家」だし、小説家の吉野紅雨は、ヨーロッパを見て「過激なる西洋藝術の崇拜者」となつて歸國して以來、日本の「新しい時代の新しい凡てのもの」が「西洋を模して西洋に及ばざるものばかり」なのに絶望し、「舊い時代の遺物」に「捨てがたい懐かしさ」を感じる「現代に失望した夢想家」

である。

これら五人はいづれも作者荷風の分身であり、作品は、まづ小山が江戸の滑稽本「花暦八笑人」の趣向を借りて、時代と歩調の合はぬ仲間を集め世相を笑つて樂しまうといふ考へを起したのが發端をなし、それに同調する仲間達が取り交す會話や手紙によつて全篇が構成されてゐるのだが、福田恆存が書いてゐるやうに、「明治の作家のうち荷風ほどヨーロッパと日本との間隙を直視し、意識的にそこに喰ひいつていつたものは他になかつた」と云つてよく、「彼ほどヨーロッパの本質を見抜いてゐたものはなかつたし、また彼ほど日本人の限界を知つてゐたものはなかつた」のであつて、「冷笑」は、さういふ彼我の「間隙を直視」する卓拔なる文明批評家永井荷風の面目躍如たる作品である。就中、興味深いのは、荷風が吉野紅雨をして語らしめる、近代日本の苦境の本質である。即ち、西洋化に邁進せざるを得なかつた近代日本の宿命は、最も本質的な意味に於て、吾々日本人に如何なる苦境を強ひたのか。

或時、吉野は西洋化の可否を繞つて小山と語り合ふ裡に、日本が「西洋化するならするで可いが、日本人は他日過去を顧みて後悔する様な事はないだらうか」、その點、自分は「解決のできない疑問に苦しめられ」と云ふ。日本の風土や氣候の力を強く感じ取るやうになるにつ

れて、富士の景觀の如き「敷島の山水」には「間の伸びた三十一文字の感想の如何に調和するものか」、模倣の現代を罵る己が心の「奥底にどれだけ深く傳説の力の根ざして」ゐるか、つくづく痛感したからだといふのである。小山が、「西洋崇拜者」の君が「大和心の敷島の道に戻らうと云ふ」のかと擲楸すると、吉野は答へる。「戻る事ができたなら無上の幸福でせう。今の時代を深く感じてそして吾々は靜に自分の足元を眺めてみたら、何も文學者ばかりではあるまい。誰だつて舵の無い船に乗つてゐるやうな不安に打たれなければなるまい。祖先の残した傳説一方に頼るには餘りに其の力の弱きを氣遣ふし、と云つて盲目滅法に馳出すのも此れ又餘りに輕々しくはなからうか。舵のない漂ふ船、これが吾々の生きつつある現代といふものでせう」。

「冷笑」が書かれた明治の昔も平成の今も、日本は「舵のない漂ふ船」だが、明治と異り、それゆゑの「不安」、「解決のできない疑問に苦しむ日本人は、今は文學者にだつてゐるかどうか怪しからう。それは詰り、日本といふ「舵の無い船」が、漂流どころか、精神的には既に沈没し去つてゐる事の證しではあるまいか。